

島浦村観音堂の無文壺に近く、時代が降るものと考えられる。擂鉢は擂目が粗く深目に施されており、施文の特徴から珠洲焼後半（珠洲第IV期）の時期と対比される。即ち、本遺跡の陶質土器は南北朝頃かそれよりやや降り、室町時代の中頃（15世紀頃）に属するものと推考される。（関 雅之）

- 註 1 室岡 博 『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館教養選書第1篇 昭和47年
2 室岡博・寺村光晴 「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古 7 昭和37年
3 本間嘉晴・計良勝範 「栗島の考古」（『栗島』新潟県教育委員会）昭和47年
4 浜岡賢太郎他 「窯業一北陸」日本の考古学・歴史時代上 昭和42年
5 中川成夫他 「水原郷の遺跡・遺物」（『水原郷』新潟県教育委員会）昭和46年
6 五島美術館 『北陸の古陶』図86
7 金子拓男 「新潟県柏崎市上輕井川の経塚」越佐研究第22集 昭和40年
8 川上貞雄 「正安元年在銘経筒の出土」水原郷土誌料第5集 昭和48年
9 中川成夫 「十日町市小黒沢発見の正平在銘碑について」越佐研究第20集 昭和38年
10 小野田一九 「栗島の石造遺物」（『栗島』新潟県教育委員会）昭和47年

2 新潟県における珠洲焼

石川県の珠洲市南部に成立した珠洲古窯址群は、須恵器の伝統的な巻上げ・叩きしめ手法をとり、還元焰焼成によって無釉の雑器を生産していた。この珠洲焼については檜崎彰一・浜岡賢太郎・吉岡康暢の諸氏によって研究が進められ、編年の大要も明らかにされている。

近年、新潟県においても珠洲焼に対する関心が高まっているが、珠洲古窯址の詳細な調査報告が少ないため、足踏状態を呈している。

ここでは珠洲焼と限定せず、須恵器の伝統的な焼成・成形技法を有する中世陶器を、珠洲系陶質土器という名称で呼ぶこととする。この珠洲系陶質土器が珠洲焼そのものである場合もあり、また、県内地窯の発見によって2分されることもあり得ると考えている。

さて、県内における珠洲系陶質土器の発見例を整理すると、その内容から (1)壺と擂鉢または片口の組み合された状態で出土する骨蔵器、(2)前者と同じ組み合せで出土する経筒外容器、(3)城館・屋敷跡などの生活址から出土する例、(4)海中から発見されるものの4種に大別される。この大別は比較的発見頻度の高いもので分けたが、その他として錢壺及び伝世品として現在でも使用されているものなどの例もある。

(1)の例としては柿崎町金谷・上越市善光寺浜・栗島浦村観音堂の中世墓址群が代表的である。(2)としては柏崎市軽井川・見附市小栗山・巻町金仙寺・笹神村華報寺・神林村里本庄など類例が多い。(3)は上越市御館・下田村五十嵐館・水原町堀越館などから出土している。(4)は特殊な例で名立町沖合タラバ・能生町徳合崎沖・寺泊沖合タラバ・岩船沖合などがある。これらは珠洲系陶質土器発見の一端であり、集成すればかなりの数になるものと考えている。特に(1)・(2)・(4)で指摘した遺跡の陶質土器は、石川県の珠洲焼そのものと考えて誤りないものが多い。

県内における珠洲系陶質土器の分布をみると、北は岩船地方の栗島にまで至り、山間部では塩沢町大御堂経塚から石川県長瀧経塚の四耳壺と酷似する経筒外容器が出土し、ほぼ全県にわたって分布す

るものと考えられる。

山形県でも中世墳墓から条線状叩目を有する須恵器系骨蔵器が出土し、中には珠洲焼と考えられるものもある。また、青森県の前田野目窯跡における、古代～中世土器群のあり方なども問題となろう。^(註9)

珠洲焼の分布について吉岡康暢氏は「越前・越後などの遠隔地で出土する珠洲焼に酷似した陶質土器の全て珠洲古窯の製品と考えることは、その生産規模に照らした場合早計である」とされ、また反面、出土地が「能登半島につらなる中世の海港付近であることとも看過できない」と指摘しておられる。今後、新潟県においても、在地中世古窯の調査研究を進める必要性を痛感している。(関 雅之)^(註10)

- 註 1 室岡博・寺村光晴 「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古 7 昭和37年
- 2 室岡 博 『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館教養選書第1篇 昭和47年
- 3 本間嘉晴・計良勝範 「粟島の考古」(『粟島』新潟県教育委員会) 昭和47年
- 4 『御館跡緊急調査経過報告』新潟県教育委員会 昭和41年
- 5 金子拓男 『五十嵐小文治館発掘調査報告書』下田村教育委員会 昭和48年
- 6 註 2 と同じ
- 7 寺村光晴・久我勇 『寺泊町のおいたち』
- 8 細矢菊治 『先史時代から中世まで—南魚沼郡の歴史』 昭和47年
- 9 酒井忠一 『鶴岡市三瀬地内積石塚二例』庄内考古学第11号 昭和47年
- 10 坂誥秀一 『津軽・前田野目窯跡』昭和44年
- 11 吉岡康暢 「珠洲古窯について」(『北陸の古陶』五島美術館)

3 中世における土師質土器

土師器の概念規定については種々の議論がなされてきたが、土師部の作った土器と言う伝統的な名称は捨てられ、古墳時代の素焼土器という考え方がある。しかし、土器自体の胎土焼成・成形技法などから見れば、古墳時代以後の土師質土器と器形及びその構成をのぞけば、質的な差違はない。本遺跡出土の土師質土器は中世の遺物群に伴出したものであるが、土師器と性質上の相違はない。^(註1)

県内でも中世土師質土器が話題となりはじめたのは、上越市御館遺跡の発掘調査からである。しかし、該土器が具体的な形で取上げられたことはなく、下田村五十嵐館跡の調査報告において、実測図をのせ燈明皿であることを指摘された。県内では中世墓址・経塚・館跡の発掘調査が進められているが、陶磁器・陶質土器などに在地生産品はわずかしかない。この中にあって、土師質土器は手捏粗製の日常雑器として、時代及び地域的な特徴を如何なる形で示しているか考えてみたい。^(註2)

本遺跡出土の土師質土器を、その器形の特徴から第1類～第4類に大別した。第1類～第3類は共に丸底または丸底風の底部になるもので、第1類は口縁部が短く直立状に立上る浅い皿で、スヌの付着などから燈明皿と考えられる。これに酷似する土器は石川県金沢市小坂第1号墳の中世墳墓遺構から出土して、室町前期(14世紀前半頃)の珠洲焼骨蔵器に伴している。第2類は口縁が強く外方に開き、口辺と体部の接合境に段状の稜を有する。該土器と同様、体部に稜を有する皿形土器は石川県金沢市普正寺遺跡・金沢市大場遺跡からも検出され、いずれも口径10cm内外、器高2cm位で本土器と近似している。県内でも第1類に近いものとして下田村五十嵐館跡でも注目され、用途は燈明皿であろう。第3類土器はやや深めの土器であるが、口縁立上り部の特徴は第1類と規を一にするものである。^(註3)